

絶え間ない進化を続ける コラボレーション・プラットフォーム Lotus Notes/Domino 6.5



日本アイ・ビー・エム株式会社
ソフトウェア事業

ビジネス営業開発部グループリーダー
鈴木 宏昭氏

世界No.1のグループウェアとして有名なLotus Notes/Dominoは昨年、誕生からちょうど15周年を迎えました。エンドユーザーの生産性向上とTCO削減を図るため、常に最新の標準技術と新機能への対応を行ってきた同製品は、そのポテンシャルの高さと信頼性から、現在も国内外でデファクトスタンダードの地位を確保し続けています。

そこで今回の「SPOT LIGHT」では、コラボレーション・プラットフォームとして絶え間ない進化を続ける「Lotus Notes/Domino 6.5」にフォーカス。その特長と導入効果について、日本アイ・ビー・エム株式会社 ソフトウェア事業 ビジネス営業開発部グループリーダー 鈴木 宏昭氏にお話をうかがいました。

常に次世代を見据えた オープンな技術を採用

—— Lotus Notes/Dominoといえばグループウェアの代名詞とも言える存在ですが、まずはこれまでの歴史と変遷を簡単にたどっていただけますか。

鈴木： わかりました。グループウェアというコンセプトは1960年代にすでに提唱されていましたが、実際にビジネスシーンで利用されるグループウェアの市場を切り開いてきたのは、Lotus Notesの最初のバージョンが登場した1989年にまでさかのぼります。

Lotus Notesの原型は、「Notesの父」と呼ばれるレイ・オジーが学生だった1973年に、メインフレームで動作する簡単なメッセージの書き込みと、それに対してコメントを付けることができる「notes」と呼ばれるシステムでした。その後、オジーたちは1984年にLotus Notes製品版の開発母体となるアイリスアソシエイツという会社を設立し、1989年の初出荷により「グループウェア」という新たな分野を確立しました。

そして時代の流れや、お客さまのニーズに対応しながら着実なバージョンアップを重ね、昨年の2004年で15周年を迎えることができました。ドッグイヤーと呼ばれるIT業界では奇跡的とも言えるほど、息の長いソフトということになります。

—— その過程でデファクトスタンダードの地位を築き上げたということですね。

鈴木： ええ。1989年に生まれたLotus Notesは1990年代の前半、すでに1,000社を超える企業に採用され、LANの普及にともない、早くからデファクトスタンダードとしての地位を確保しました。この間の1995年にLotusは、Lotus Notesの大規模ユーザーでもあったIBMと合流しています。そしてR4.5のバージョンからクライアントを「Lotus Notes」、サーバを「Lotus Domino」と名付け、インターネット標準技術の採用を進め、R5で完全対応するという流れをたどります。いくつか数字をあげますと、現在は全世界で1億1,300万ユーザー以上、日本でも1000万のユーザーさまにご愛用いただいております。国内シェアでは50%を超えています。また業種別でも圧倒的なシェアを獲得しており、特に都市銀行さまにおいては、シェア100%を達成しています。

—— 国内外でそれほど大きなシェアと信頼を獲得できた理由は、どのような点にあるのでしょうか。

鈴木： それは、Lotus Notes/Dominoのアーキテクチャに、インターネット技術やJava、J2EEといった時代の波を取り込んできたことです。同時に、お客さまの資産を守るため、アーキテクチャの一貫性を保ってきたことにあると思います。他社のグループウェアに対するアドバンテージは、「オールインワン」「アプリケーション開発の容易さ」「レプリケーション」という3つのポイントに整理されます。

まず「オールインワン」ですが、これはグループウェアに必要な機能をLotus Notes/Dominoですべてパッケージ化しているということです。(図3)を見ていただければわかるように、Lotus Dominoサーバは会社のあらゆる情報を納めたキャビネットのようなもので、このキャビネットを開け、ハンダーを開くと文書やグラフ、音、画像などがあるといった単純な構造です。そこに、各データを蓄積するためのフォームや、探しやすいようにするインデックス、それらを使いやすい形式

で見せるためのビューなどを提供しています。

また、電子メールやスケジューラのほか、開発環境やセキュリティ、クライアントとしてのWebブラウザ/モバイル対応、全文検索、ディレクトリといった各種機能もすべてひとまとめに提供している点が、それらを別々に用意しなければ使えない他のグループウェアとは一線を画す特長だと言えるでしょう。

もちろん、オールインワンだから、すべての業務をLotus Notes/Dominoの世界だけで行ってくださいと言っているわけではありません(笑)。お客さまの中には、ディレクトリはLDAPにしたいとか、Webアプリケーションや基幹システムとも連携したいといった、いろいろなご要望があります。その点、Lotus Notes/Dominoは常に最新の標準技術に準拠しているため、他のオープンスタンダードな製品ともシームレスに連携することができ、幅広いシステムとの戦略的な統合が可能となっているのです。

次に「アプリケーション開発の容易性」ですが、これはLotus Notes/Dominoが非常にカスタマイズしやすいことを示しています。簡単なフォームやビューの開発から、.NET連携のアプリケーション、先進のJ2EEベースのWebアプリケーション開発まで、お客さまの用途とスキル、納期に応じて適切な言語と幅広い開発ツールを利用することができます。

標準で用意されているテンプレートを使えば、データベースを少しずつカスタマイズして、さまざまな業務に合ったアプリケーションを簡単に作っていただくことが可能です。また、日立OPSSさんの「恵比寿30選」などのように、ビジネスパートナーのテンプレート集やアプリケーションが豊富にそろっているのも大きな強みと言えるでしょう。

さらに、Lotus Notes/Dominoは、離れた拠点間のデータベースどうし、あるいはクライアントとサーバ間のデータを同じ状態に保つ「レプリケーション」も非常に強力です。現在のようにモバイルPCを使って外出先で仕事をこなすような場合、インターネット経由でサーバにつながなくても常に最新のデータを使ってビジネスを展開できることも、他社製品に対する大きなアドバンテージとなっています。

図1 Lotus Notes/Domino

～デファクト・スタンダード～

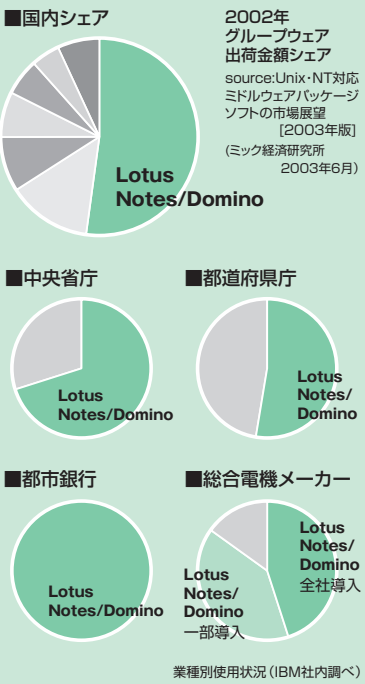


図2 Lotus Notes/Dominoの変遷

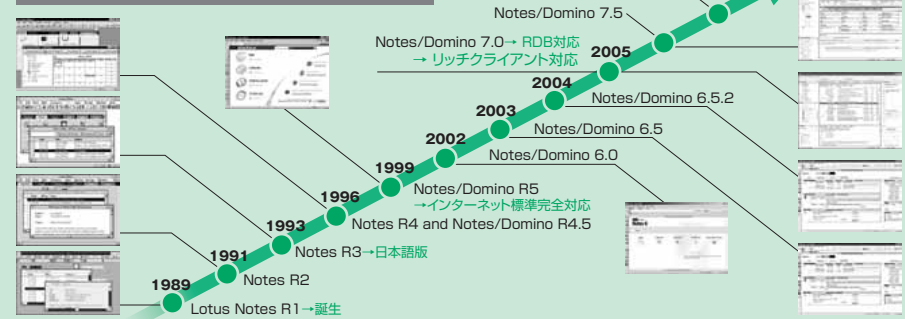


図3 Lotus Notes/Dominoの構造

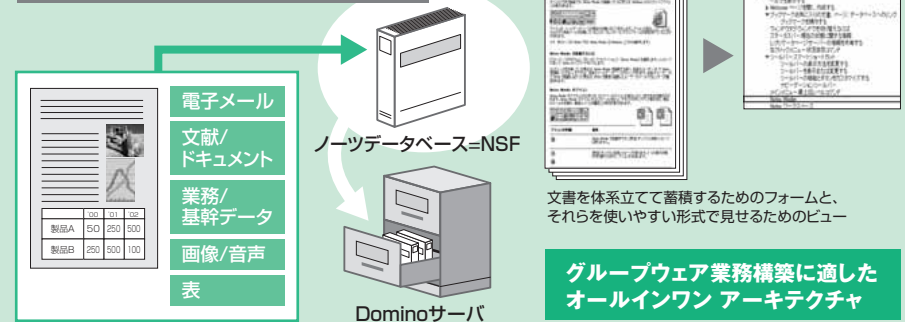




図4 Lotus Notes/Domino 6.5 新Welcomeページ



エンドユーザーの生産性向上を支援

——いまお話いただいたような特長によってLotus Notes/Dominoはユーザー層を拡大してきたわけですが、現在は最新版のバージョン6.5が提供されています。この最新バージョンにおける新機能や導入効果についても教えていただけますか。

鈴木: わかりました。従来からLotus Notes/Dominoをお使いのお客さまが、新たなバージョンに期待されていたポイントとしては、「導入効果の向上」「TCO削減」「セキュリティ向上」などがあげられます。そこで最新バージョンである6.5では、これらのご要望に応えるため、それぞれの観点から機能強化を図りました。

まず「導入効果の向上」としては、クライアントの使い勝手を一段とアップさせたのが特長です。(図4)にあるのが起動時に表示されるポータル画面の「Welcomeページ」です。皆さんが朝、会社に来られてLotus Notesを立ち上げると、ここからメールやスケジュール、Webサイト、データベース、ファイルシステムといったあらゆる企業資産にすばやくアクセスし、ビジネスを展開することができます。

画面の右端にある「コンタクトリスト」は、だれが今、オフィスでPCを操作しているかの在席確認が行える機能で、現在操作している場合は緑色、PCから離れ一定時間経過すると自動的に黄色に変わるようになっています。これはプレゼンス機能とも呼ばれ、近年注目を集めているファンクションですが、Lotus

Notesでは受信ボックスとも連動し、メールの横に同じ色が表示されますので、例えば今読んだメールの差出人が在席しているとわかったら、すぐにチャットを開始したり電話をしたり、メールで返事を出す以上のレスポンスですばやく行動に移せるのがユニークなポイントです。

また、特定のメールをビューで目立つようにするフォローアップ機能、メールの添付ファイルを対応アプリケーションを別に立ち上げることなくダイレクトに編集できる機能など、エンドユーザーの生産性向上をさらに加速させる機能が満載されています。

さらにIPネットワーク/音声サーバとLotus Dominoを統合する「Lotus Domino Unified Communications Services (DUCS)」もユニークなオプションと言えるでしょう。これはIP電話で入ってきたボイスメールや留守録をメールに取り込める機能で、例えばお客さまから電話で寄せられたクレームなどを担当部署に「生の情報」として回し、適切な対策を迅速に実行できるような使い方を想定しています。

——「TCO削減」については、どのような点を強化されたのでしょうか。

鈴木: ネットワーク圧縮や複製機能などの改良によって、サーバのパフォーマンスを一段と向上させました。新たに追加された「シングル・コピー・テンプレート機能」では、複数データベースで保持される設計要素を1か所で格納・管理でき、サーバ上のディスクスペースを大幅に節約することが可能です。

さらに、強力なサーバ監視機能と、万一サーバが落ちた場合にも自動的にシャットダウンして立ち上げ直す自己修復機能によって、稼働時間を最大限に伸ばすことができるようになったほか、ポリシーベースの集中管理機能、複数組織を1つのディレクトリで管理できる機能など、運用管理機能の向上も含め、システム全体のTCO削減を実現しました。

一方、早くから公開鍵暗号方式を取り入れるなど、従来から定評のある「セキュリティ機能」についてですが、6.5ではスパム対策とメール・ジャーナル機能を一段と強化しました。スパム対策としては、悪質なユーザーからのメールを検知してサーバで一括削除を行うことが可能となります。

また近年は企業のコンプライアンスの観点からも、メールの保管・監査体制の強化が求められています。これに対応するメール・ジャーナル機能では、特定の受信者や送信者、件名、本文によって各サーバのデータベース上にメールをコピーすることができます。これにより、メールを媒介した情報漏洩はもちろん、業務外でのメール使用の抑止も期待できるというわけです。

既存ユーザーには6.5へのアップグレードを推奨

——Lotus Notes/Domino 6.5を導入すれば、生産性のさらなる向上とTCO削減が期待できることはよくわかりました。しかし実際のところ国内では、まだ従来バージョンのまま業務を継続しているお客さまが少なくありません。そういったお客さま層に対しては、どのようなメッセージをお持ちでしょうか。

鈴木: 確かにLotus Notes/Dominoをお使いのお客さまは、基幹システムと連携したミッションクリティカルな業務に適用

されているケースが多いため、新バージョンが出たからといって、すぐにアップグレードすることはお考えにならない場合があるかと思います。しかし私たちは今年こそ、国内外でのアップグレード・ノウハウが蓄積してきた6.5を安心してお使いいただける、いいチャンスであると考えています。6.5が実現したサーバのパフォーマンス向上や運用管理機能の強化、サーバ統合によるTCO削減は、アップグレードを決断するにふさわしい大きなメリットを備えているからです。

また、新規導入をお考えのお客さまも、Lotus Notes/Dominoが価格で勝負するような製品ではないため、導入コストが1つのハードルになっている場合があるでしょう。そういったお客さまに対しても、Lotus Notes/Dominoは間違いなく、それに見合うだけの性能と導入メリットを提供できる製品だと自負しています。

——それだけの価値があるということですね。

鈴木: そうですね。そのために私たちは今後、Lotus Notes/Dominoの製品力に加えて、Lotus Notes/Dominoを支えるユーザーコミュニティの活性化にも一段と力を注いでいくことが必要だと考えています。具体的にはお客さまと日立OPSSのようなビジネスパートナーさま、そしてIBM、三者のコミュニティを活性化することによって、いろいろなアイデアやご意見、活用するためのノウハウを共有していく場を強化していきます。

なかでも日立OPSSは日立グループの一員として、さまざまな業種のお客さまに向けたエンジニアリング力をお持ちです。その意味でもLotus Notes/Dominoの導入支援に加えて、活用方法のコンサルティングや運用支援といったトータルソリューションでもご協力願えばと考えています。

また先ほど、アップグレードに対するお客さまのレスポンスにタイムラグが発生するお話をしましたが、その1つの要因には、ライセンス料だけでなく、作り込んだアプリケーションの移行費用の問題があるかと思っています。そこで今後は、いかに低コストかつ容易に移行していただけるかの情報提供に加え、さらに一歩踏み込んだ移行ツールの提供なども予定しています。

もう1つ重要なのは、「恵比寿30選」のようなアプリケーションのひな形を、一段と充実させていくことです。すでに45社さまから60種類のテンプレートを作っていただいておりますが、今後はお客さまからもオリジナル・テンプレートを募集し、他のお客さまにも活用していただけるような「アプリケーション・テンプレート・コンテスト」なども開催していきたいですね。

——先ほど導入コストの問題に触れられましたが、御社では導入しやすいSMB(Small and Medium Business)市場向けのソリューションも用意されていますね。

鈴木: 中堅企業向けのポータル・グループウェア「アテネ」のことですね。この製品はLotus Dominoをベースとした新しいソリューションで、ポータルを中心に日本の企業文化に合った機能をWebブラウザから軽快に利用できるのが特長です。通常製品より機能を絞り込んだ分、価格も非常にお手頃となっていますが、拡張性については通常製品と変わりなく、必要な機能はオプションでどんどん追加することが可能です。500ユーザー以下の企業さまには、こちらもお勧めしたいと思います。

——今年も国内では6.5へのアップグレードが重要なテーマになっていくと思いますが、やはり次期バージョンとなるLotus Notes/Domino 7の動向も気になります。どのような進化を予定されているのでしょうか。

鈴木: 7.0の出荷時期は2005年中盤を予定していますが、ねらいは引き続き、TCOの削減とパフォーマンスアップ、他システムとの連携強化が中心となります。なかでも大きな目玉となるのが、これまでのNSFに加えて、データストアにDB2が選択できるようになることです。Lotus Notes/DominoデータとアプリケーションをDB2データベースに格納できることにより、バックエンドの基幹システムにRDBMSをお使いのお客さまは、今まで以上にシームレスなデータ連携が可能となります。

またJ2EEで書かれたWebサービスをLotus Domino上で稼働できるようにすることや、WCT(Workplace Client Technology)との連携によって、従来からのLotus Notesクライアントに加え、サーバで集中管理されたリッチクライアントも選択できるようになります。

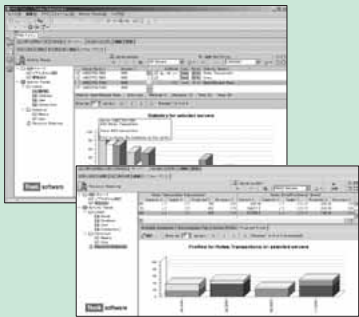
——Lotus Notes/Dominoはこれからもさらに進化し続けていくわけですね。

鈴木: Lotus Notes/Dominoの歩みは今後も決して止まることはありません。常に時代のニーズと最新の標準技術と新機能を採り入れながら、TCO削減とお客さまの生産性向上によって企業価値の向上を強力に支え続けてまいります。ご期待いただきたいと思います。

——本日はありがとうございました。

図6 Lotus Notes/Domino 6.5 TCO削減

- パフォーマンスの向上
転送データ圧縮 複製時間短縮
- システムリソースの削減
データベースサイズ、ディスク容量
- 運用管理機能の向上
メールセキュリティ強化 モニタリング機能 耐障害性向上



この記事に関するお問い合わせ先

株式会社日立オープンプラットフォームソリューションズ 企画部

TEL: (03) 5796-8301
FAX: (03) 5796-8453
URL: http://www.hitachi-opss.com/

図7 ポータルグループウェア「アテネ」 インフラネットとLotus Dominoが低価格で簡単に導入でき、Webですぐ使える製品

ポータルを中心に、日本企業の文化にあった機能をWebブラウザから軽快に利用できます

図8 Lotus Notes/Domino ロードマップ

